

## 近代東アジアの仏教交流と戦争

坂井田夕起子

桃山学院大学 非常勤講師

（現 愛知大学国際問題研究所 客員研究員）

### 緒言

古来日本から多くの留学僧が中国へ渡ったことは周知の事実であるが、20世紀になると中国・台湾から留学僧や視察団が来日したことはあまり知られていない。また、日清戦争以後の日本仏教界が、教団をあげて日本軍の海外侵略に協力した事実は多少なりとも知られているが、一方で戦争を回避し、日中仏教の学術的交流を目指した僧侶たちの存在はほとんど知られていない。本研究は、日本と中国が文化提携と同時に政治的衝突を抱えた時代の日本人僧侶が、どのように中国の僧侶を支援し、仏教改革に協力しようとしたのか、その一端を明らかにする。

### 調査の方法

本研究では、1930年代から40年代にかけての日本仏教界で「支那通」僧侶として著名だった藤井草宣（1896～1971）の活動を精査することから着手した。第一に、藤井が住職を務めていた愛知県豊橋市浄円寺に残された膨大な資料（以下、藤井草宣資料）を整理し、目録を作成した。ダンボール20箱以上の雑多な史料の四分の一は中国（当時は中華民国）時代に発行された仏教書で、三分の二程が仏教雑誌・新聞である。残りは仏教界や興亜院華中連絡部など、日本の諸団体が中国での活動を記した雑誌や冊子、記念集などであった。

中華民国時代の仏教雑誌については、『民国仏教期刊文献集成』全209冊（中国書店、2006年）<sup>1)</sup>『民国仏教期刊文献集成・補編』全86冊（同前、2008年）<sup>2)</sup>『民国佛教期刊文献集成 三編』全35冊（同前、2013年）<sup>3)</sup>のシリーズが刊行され、中国に散在する300種類を超える仏教雑誌・書籍が復刻され、簡単に閲覧できるようになった。しかし、藤井草宣資料を精査すると、中国でも日本でも発見されていない雑誌が多数含まれていることがわかった。本研究を開始する前は、これほどの資料が浄円寺に眠っているとは予想できず、よい意味での大誤算であり、大きく研究計画を修正しなければならなくなった。

また、藤井は中国での書籍購入の領収書など雑多な資料も几帳面に保管しており、雑誌の受贈経過や当時の考えなどを裏表紙や雑誌の空白部分に書き込み、メモを挟んでいることもわかった。これらの雑多な資料を分析することで、藤井と彼の活動を支えた中国側のカウンターパートの交渉を知ることができると考え、詳細に読み込む作業を行った。

第二に、藤井草宣がかつて特派員を務めていた仏教系の専門新聞『中外日報』<sup>4)</sup>（京都）について、1925年から1945年までの記事を読み込み、日本仏教界全体の動きと藤井独自の活動、執筆記事を把握した。また、同時期『中外日報』とライバル関係にあった『文化時報』<sup>5)</sup>（京都）の記事も読み込み、同時期の日本仏教教団の対中国関係の動きを把握した。第三に、日本が日中戦争時期の占領地統治のために設立した興亜院の華中連絡部が、上海を中心とした宣撫工作に宗教団体を動員した中支宗教大同聯盟の機関紙『中支宗教大同聯盟月報』や『中支宗教大同聯盟年鑑』を読み込んだ。これらの機関紙の半数は浄円寺に保管されていたが、残りの半数は近代キリスト教研究者の松谷暉介氏から提供された貴重な資料である。

最後に、浄円寺資料や日本の大学図書館を中心に藤井草宣の執筆した記事を調査、収集した。藤井は非常に数多くの記事を執筆し、ときにはペンネームも使っていた。大谷大学の機関紙や日本の仏教雑誌、仏教新聞のみならず、中国やシンガポールで発行された雑誌にも記事を寄せていた。また彼自身が発行した『日華仏教』という雑誌は、日本の仏教系大学の図書館に散在しており、これらの資料を網羅する必要があった。

### 考察および結論

藤井草宣資料の分析からは、以下のことが明らかになる。

まず、浄円寺の藤井草宣資料にある中国語の仏教雑誌は、最も古い『仏学叢報』の1913年発行であるが、それ

以外に1910年代のものはない。雑誌や冊子は1925年の東亜仏教大会（東京）以後のものが大部分であり、藤井の上海留学期間（1928～1931年）前後に発行されたものが三分の一以上を占める。雑誌に挟まれている書店の領収書を分析すると、定期購読をしていたものも少なくないことがわかる。雑誌は太虚ら改革派と呼ばれる僧侶とその弟子たちや上海の居士たちが発行した雑誌が多い。中でも、近代中国で初めて組織された仏教統括団体である中国仏教会の機関紙や地方の仏教組織についての資料はかなり積極的に入手しており、中国仏教界全体の動きについても関心が高かったことがうかがえる。南京国民政府成立前後で吹き荒れた「廟産興学」運動について、日本仏教界では明治維新の「廢仏毀釈」と重ね、中国仏教界の行方を注意深く見守っていた背景がある。日本仏教界が西洋を模倣して仏教の近代化に成功したように、太虚ら改革派が日本仏教の学術的成果を採り入れて発展させることを藤井は強く望んでいたためであろう。

次に多いのは、藤井草宣が満州事変後の排日機運の高まりによって帰国を余儀なくされてから、汎太平洋仏教青年大会（1934年）の中華班班長となって、中国側との折衝に尽力した1930年代半ばの資料である。雑誌の多くを占めるのは、やはり太虚の弟子たちが編纂した雑誌であり、『海潮音』『現代僧伽』『人海燈』『正信半月刊』などが目につく。当時、『海潮音』を編輯していた太虚の高弟大醒は、特に藤井との交流があり、大醒の日記には藤井から定期的に届く日本の資料を心待ちにしていた記述も見える<sup>6)</sup>。この時期の雑誌には、「交換希望」とか「寄贈」といった印鑑の押されたものが多数見える。また、上海の居士団体との関係も継続していたようで、『仏学半月刊』は定期購読に分類される。藤井が提供したと思われる日本の資料や学術論文の翻訳、また日本の真言宗についての記事が散見される。しかし、満州事変から盧溝橋事件に到る時期は藤井にとって逆風にさらされた時期でもあった。太虚らの満州事変批判や日本の軍事侵略への抗議活動は、日本仏教界から「排日活動」として非難され、藤井の活動事態も批判にさらされることになり、日本仏教界全体の対中国交流組織と位置づけて設立したはずの日華仏教学会も設立わずか1年余りで頓挫してしまった。日中仏教交流による相互理解の促進といった藤井の活動目標は、現実の政治の中で挫折させられてしまったのである。

最後に、日中戦争時期の雑誌であるが、藤井草宣資料においては数えるほどしか保存されていない。それは日

本軍の中国侵略により、多くの雑誌が停刊を余儀なくされたことと無関係ではない。太虚は蒋介石政権と共に重慶を中心とした内陸に移動し、『海潮音』発行を継続したが、日本軍占領地で活動を継続した藤井の手元には以後届いていない。日中戦争時期の仏教雑誌で藤井草宣資料にあるのは、日本軍占領地で発行されたいくつかの雑誌が中心である。それも、藤井自身が執筆した号やおそらく藤井が執筆を依頼した中国人僧侶の文章が掲載された号である。例えば、杭州で発行された『晨鐘』やアモイで発行された『大乘』などがあげられる。日中戦争より早い時期になるが、台湾の雑誌『南瀛仏教』も主に藤井が寄稿した号を中心に浄円寺に保管されているが、積極的に収集された形跡はない。この時期の藤井が尽力したのは、日本軍占領地に残らざるを得なかった中国側僧侶たちの救済である。特に、大醒との関係は戦後の中国・台湾仏教界への影響という点で注目される。また、『中外日報』に藤井が寄稿した記事から、彼らとの協力関係の一端がうかがえる。中国人僧侶の仁山と協力して行った法要では、その手順の打合せ経緯も浄円寺の著書の裏側に毛筆で書き残されており、中国側を尊重した内容となっていることがわかる。これらの藤井草宣資料から、従来の研究における中国人僧侶に対する「対日協力者」「抗日愛国」といった単純な二元論が学術的ではないこと、「日本仏教界の戦争協力」にしても、日本政府や日本教団の資料による分析だけでなく、中国の現地での資料も精査した研究が求められる段階に来ていることが明らかになった。

## 今後の課題

今回の調査では、浄円寺の藤井草宣資料が当初の予想を遥かに超えて膨大かつ貴重であることがわかったため、当初の予定を変更し、藤井草宣個人に焦点をあてて、彼と中国側の仏教交流についての分析を進めた。今後は、藤井の活動のカウンターパートであった太虚の弟子の中で藤井に協力的だった大醒と批判的だった法舫が日本仏教界の中国進出をどのように見ていたのかを比較したり、日本仏教界との交流活動に冷淡であった欧陽竟無ら内学院の居士たちとの関係を分析するなど、中国仏教界全体の動きをも把握したマルチアーカイブ方式による調査を進めたい。藤井草宣資料は、その際にも非常に有益であり、今後の調査継続は欠かせない。

## 謝 辞

本研究を遂行するにあたり、公益財団法人三島海雲記念財団から平成27年度（第53回）学術研究奨励金を賜りました。これによって密度の高い調査が可能になり、その成果を日本近代仏教史研究会第24回大会で発表することができました。また、研究成果の一部は中国研究会の発行する学術雑誌『中国研究月報』に投稿することができました。心より御礼申し上げます。

## 文 献

- 1) 黄夏年主編：民国仏教期刊文献集成，2006.
- 2) 黄夏年主編：民国仏教期刊文献集成・補編，2008.
- 3) 黄夏年主編：民国佛教期刊文献集成三編，2013.
- 4) 中外日報，1925-1945.
- 5) 文化時報，1925-1944.
- 6) 大醒：大醒法師遺稿，1963.